



久後 恵美子 さん（旧姓 八木）

平成13年3月卒業／特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫 副理事長

今の仕事のきっかけは、自然 学校を題材にした卒業論文

今から20年前。卒業論文発表会で、「子どもたちにとって自然学校は欠かせないものだと思うし、学校教育でできなければ社会教育で補う必要がある」と話した久後さんは、現在NPO法人生涯学習サポート兵庫（通称：SHOSAPO）の副理事長として働いています。SHOSAPOとは、居場所・子ども・地域・つながる をテーマに多様な事業を展開する団体です。有名なプログラムは、ガスなし、水道なし、電気なしという一週間を過ごす「無人島学校」や瀬戸内海と日本海に面した兵庫県を徒歩で縦断するという「チャレンジウォーク」などがあります。この活動には、本学の学生たちもボランティアとして参加しています。

「兵庫教育大学に行きたいと思ったきっかけは、実の母が教師だったから。母のような教師になりたいと思い推薦入試を受けた。面接では、面接官の先生たちをみんな笑わせました！」と、豪快に笑って話す久後さん。その場にいる人たちを元気に明るくする魔法をもった人です。

大学内では野球部のマネージャーに児童文化研究部、ボランティアサークル、ネイチャーサークル…とフル回転！

面接官を笑わせて入った大学での4年間は、とにかく毎日フル回転で動き1日24時間では全く足りない…。その中でも印象に残っているのが、児童文化研究部（現在は無い）の活動だったと当時を振り返ります。

「児童文化研究部の人形劇では、人形はもちろんのこと、シナリオも音響も自分たちで作成活動をしていた。また兼部の学生がほとんどだったので、練習はいつも22時から始まり、深夜までやっていた。地域の幼稚園のクリスマス会や子ども会などで披露していた。また部長を経験し、神戸などにも自分たちで売り込みに行き活動していた」全てが手作りで、そして自ら売り込みにも行く。その頃にそんな経験ができていたことを改めてすごいと思う！物怖じしない積極的な行動の積み重ねが、じわりじわりと確実に自分を高めるものになったといます。



大学外で得た「価値観の違い」と「大切な違和感」

先生になろうかな？でも違うかな？と思うようになったのは？と尋ねると、「『自然学校』が大きい」といいます。続けて「バイト先の先輩に『自然学校』に誘われた。初めて行った自然学校でうまくいかなかったことがとても悔しくて、そこから何回も自然学校に行くようになった」さらに「部活動やサークルは同じ大学の仲間と触れ合う機会が多い。

自然学校では**価値観の違い**を感じたかったので、別の大学の学生と行くようにしたし、同じ大学の人達とは絶対に行かないように徹底していた」と振り返ります。

大学外での活動の中で、価値観の違いを感じ刺激をいっぱい受けた久後さんは、当時と今の学生の考え方は違うといます。「今の学生たちはいろんな引き出しの中で“教師”っていう職業についてる子が多くなっていくけど、私たちの頃はそうではなく、『教員になりたい！』『絶対に教員を目指す！』『部活も頑張る！』というまじめな子が多い中で、他の引き出しをあける、他のドアを開けることの方が違和感として感じられていたかなと。でも、**私はその違和感がとても大切な違和感**だと思っていて、その違和感があることが、とても意味があることなんだなと思って過ごしていた」そのことに自分が気付けたのは、外に目を向けたからこそ、考えられるようになったと当時の心境を語ります。「大学に入った頃は、部活は休んだらあかんというイメージがあったけど、3年生になる頃に部活じゃない場所で感じられる価値観が逆に活きることってあるやん、人間として変わることができるという気持ち

大きくなってきた。ひとつのことで一生懸命なのも素晴らしいことだけど、100%打ち込めなくても、足りない30パーセントで人生経験をするとか、違う価値観を入れていけば100%にちかづけることはできるんじゃないか」



集団討論で『あなたの夢は何ですか？』の質問で出た答え

教師なのか、それとも？と迷いながらも教師採用試験を受けた。その際、集団討論で『あなたの夢は何ですか？』という質問をされた。「『私の夢は・・・、地域と学校とかが融合しながら社会や地域の中で、子どもを育てる未来です。その中には自然とか人とかつながりが見える未来で、その仕組みの中に私がいるということです』と話した久後さん。他の人たちは、学校の先生で・・・と答えている様子を見て、あまりにも自分とは違うことに気が付き、自分は教師ではないとその場ではっきりとわかったといいます。その翌年、久後さんは今の職場である生涯学習サポート兵庫に入職しました。



今の

『あなたの夢は何ですか？』

教師以外の道ではなく、子どもを育てる未来で、自然と人がつながる仕組みの中に自分を置いた久後さん。今の夢を聞いてみました。

「子どもが好きということから、人が好きということに気づいた。そしてその人がいる地域が好き。そう思って社会人をスタートしていたけれど、今は子どものことを一番に考えるようになった。今の制限されることが多い世の中で、する、しないもそうだし、何を選ぶかというときも、子どもが自分で選ぶことができる選択肢をたくさん作ってあげたい。今の自分の仕事でやっていることもその選択肢のひとつになれるといいなと思っている。SHOSAPOでキャンプのチラシを毎年学校に配布しているのは、社会啓発がしたくてやっていること。絶対に生サポのキャンプに参加して欲しいというものではなく、いろんな活動があり、こんなものもありますよ、こんなことは実は家でもできる？といった“気づき”のひとつのパーツとして存在したい。そして親にも選択できる大人になって欲しいと思う」

兵教大でよかった

大学内・外での4年間があったからこそ、今の仕事があるといいます。

「兵教大で良かったなと思う。兵教大だったからこそ、学校教育もみれたし、社会教育に気づくこともできた。何を学んだかというところかというと、知識としての学びと知恵としての学びがある。また、そこで出会えた価値観もある。大学時代で学んだものでいうと、価値観の多様性、チャレンジし続けていいという精神を学んだ。大学時代の学びが今の仕事に大きく関わっていると思う」と語ります。さらに、「私は大学内での活動（部活やサークル）や大学外での活動の両方とも熱く関わってきた。現在でも教育委員会などに行くと、同僚や後輩がいて、今の最新の学校教育について議論をできたりするのもすごく大きいし、その時代に一緒に過ごしてきた人たちが教職員としてがんばっている姿が、今学校教育じゃないところで働いているところで見えてくると、すごく勇気をもらうし、一緒に何かできることがないかなと協働を生もうとする。だから、自分が与えられた環境でどこまで視野を広げられるか、一つ一つの出会いに価値を持てるかは**自分次第**かなと思う」

最後に、これからの未来をつなぐ後輩たちへ

「若いうちからいろんな人に出会って、いろんな価値観があるんだと受け入れる人間になるのは大切だ。」と話します。また「この人とは分かり合えないかもしれないけど、こういう価値観もあるんだと**認める**ことはしていかないといけない」と語る久後さん。「私自身ももっと若いうちにこの考え方ができていたら、もっといろんな経験ができたりアドバイスができたりしたんだろうな」と後悔も含め、これからの未来をつなぐ後輩たちへの期待を熱く語ってくれました。

大学時代から並外れた行動力と仲間を巻き込んで最高のパフォーマンスを作り上げていく久後さんの原動力のすべては、自身が感じた“大切な違和感”を活かしてきたからだろう。学校教育と社会教育の架け橋として活躍される久後さんに、ますます目が離せません！

